

この子供たち

(1)

イーデイス・ウオートン  
松原至大 作  
譯

訳者の言葉

イーデイス・ウオートン夫人は、千八百六十二年一月にニューヨーク市で生まれた最も異色のあるアメリカの女流作家である。アメリカ人として尊敬される家柄に人となつて、幼い時からほとんど家庭での勉学によつて、フランス語、ドイツ語、イタリア語まで体得した。十一歳で最初の小説を書いたが、二十三歳の時に、ボストンの銀行家エドワード・ウオートン氏と結婚して、それから作家生活に入った。千九百一年に第二作品集ともいうべき「敵正な実例」を発表した時、当時精細な心理描写をもつて、英米の文壇に独自の境地をひらいたヘンリー・ジェイムズ（他界する一年前に、アメリカからイギリスへ帰化した作家）の認めるところとなつた。しかも彼をして「この可憐なイデイーに、私の知識と経験との純粹なエッセンスを注いでやりたい。」とまで推称させた。

千九百六年には、パリで欧州大戦に出会つた。この時夫人は、書齋を開放して、工場閉鎖のため失業した婦人労働者に職を与えたり、ベルギーから難を逃れてきた六百人ももの孤児をひきとつて世話をしたりした。このため、フランス、ベルギーの両政府は、夫人に勲章を贈つてゐる。その時分の体験は「戦うフランス」(千九百十五年)、「アルヌ」(千九百十八年)などに描かれている。続いて千九百二十年には、「清浄な時代」を公にして、ビュリーツァ文学賞をかちえた。

本号から約一年にわたつて、拙訳を大眼にかけることとなつた「この子供たち(原書名ザ・ナルドレン)」は、千

九百二十八年の作である。巻頭の扉には「セント・クレアにいる私のよき聞きてたちに」と記してある。夫人は教養時代の大方を、ヨーロッパで送りはしたが、心はいつも母国と共にあつた。そして端正な人柄にふさわしく落ちついた眼は、いつも厳正にアメリカを批判している。「この子供たち」も、その大きな収穫の一つである。アメリカばかりとは言えないが、富裕な男女が自らの軽率のために、いかに賑々として、かげがえのないベター・ハーフを失いつつあるか。その間に生れた多くの子供たちが、母を讃え、父を讃え、いかに純真なたましいをそこなわれつつあるか。夫人の鋭い心理描写の筆は、私どもにも大きなものを与えてくれる。申し上げるまでもなく、紙数の都合で全訳することのできないのは残念であるが、作の精神は傷つけぬ心組みである。

夫人は七十五歳で、フランスで他界された。その遺産は、多くの慈善団体に寄附されたが、その一つとも見られる数多い手紙のコレクションは、エール大学の図書館に送られた。しかしそれは、千九百六十八年までは、公開されないであろうと伝えられている。

マーティン・ポインが乗っている大きな定期船が、アルジャヤス湾（北部アフリカのフランス植民地アルゼリア港があるところ）にはいつて、ひき舟がそのまわりに群つていた。ポインは、プロムナード・デッキで、大勢の一等船客が、先を争つて舷門へ出てくるのを見おろしていた。人々の顔は、無意識の中に上を向いているので、顔を検査しているようなものであつた。

「話し相手になりそうなものは、ひとりもないいつもと同じことだ。」

人によつては、旅行をして、思いがけない幸運に出会うものもある。新しい友だちができたりする。例えば、アーティンの大伯父エドワードなどは、そうである。いつも運命の神から、面白めぐり合せのヒーローにされていた。アメリカの各地を、まだ不運な巡業で暮らしていた時分のラシエル（フランスの有名な悲劇女優）に会つたとか、ジュネーヴ湖畔で、ラスキンに会つたとか、チャッツワース（英国ダービーシャーにあるデヴォンシャー公の領地で、昔スコットランドのメリー女王が幽閉されたところ）の邸宅で、監理人の説明を聞いていたら、思いがけなく当時のデヴォンシャー公に会つたとかというのである。しかもラシエルには、その後あのポストンでの歴史的公演の第一夜に、前座席に入れてもらうようになったり、ラスキンには、ヴェニス

で一月ほどいつしよに暮そうと誘われるようになり、デ公には、その邸に泊るようになるといわれるようになった。

だが、ボインの場合はちがつていた。これまでも随分旅行もしたし、それに土木技師の職柄から、世界の果てまでも行つて、なにか面白い目に会いたいとは思いつながらも、そんな経験は、一度もなかつた。人間四十六歳にもなつて、そうしたことに出会わなければ、もう永久に機会はこないであろう。

「これも、ことによると、自分の鼻の格好のせいかもしれない。」

この日の朝も、ボインは、船室でひげをそりながら、このように独りごとをいつたほどであつた。問題の鼻は、たしかに冒險的な格好はしていない。それは他人のことにまでかかずらうほど、突き出てはいなかつたし、その上についている眼も、ひどく両側にひろがつて深くくぼみ、用心深かそうな、うす明るい灰色をしていて、鼻の加勢などは、しそうにも思えなかつた。

「平々凡々。せめてこの航海中に、船室をひとり占めでもできれば、見つけものだ。」この先、まだ二週間というものを、さびしく送らなければならないと思いつながら、ひとり静かに考えこんだ。

「考えてみると、もう五年も彼女に会わない。」ボインは、バンドのゆるんだような頼りなさであつた。

ふとひとりの若い婦人が——というよりは、ほつそりとした少女が眼についた。その少女は、丸々とふとつた、血色のよい幼児をおぶつていた。それは、やせた少女の肩では、こらえられそうもない、重そうな子供である。でも、眠そうなその子の顔に向けられる少女の目には、いかにも気づかわしげな様子が浮んでいて、それが思わすも、ボインに嘆息をもらさせたのである。

「ほほう、もしおれが若かつたらなあ。かわいいそうに、あの子供は、重荷すぎる。子供部屋から、すぐにでも嫁入りをさせられたんだらう。わからずやもあるものだな。」

その若い顔の持ち主は、重荷にこらえられず、船腹に立ちどまつた、しやがんでしまつた。きちんと帽子をかぶつて、ヴェールをかけたひとりのナースが、いたわるようにその婦人の肩に手をやつたが、彼の女は、なおかたく幼児をおさえていた。するとナースはかがんで、そばにいたジブシーの子供でも着るような、はでなオーヴァを着た、赤い髪の、四歳か五歳かの女の子を抱き上げた。

「おや——もう一人いたのか。こりや、野蠻だ。かわいいそうに——」

ちようどその時、船のストワードが来て、椅子をデッキのどの辺におくのか、ボインにたずねた。ボインはそれをきめて行って、ふとかたわらを見ると、すぐ隣りに「クリフ・ホキータ人」という札がつけてあつた。

クリフ・ホキータ、なんというおかしな名であろう——だが、よく考えてみると、ボインは何年か前に、これと同じ名を見ておかしいと思つたことを思い出した。なんだ、あの男か。思えば、自分は随分永い年月を、世間から遠ざかつていたものだ。土木事業にたずさわつてから、アルゼンティンを振り出しに、オーストラリアへ行つたり、大戦後にはエジプトへまで——ほんとうに、ニューヨークの社交ダンスから遠のいていたのだ。クリフ・ホキータの名を見て、すぐにもあのハーヴァード時代の同級生を、有名なニューヨークの大金持ちになつた赤顔の、シカゴ男を思い出せないと。

この男は結婚してから、リッツ・ホテルと、馬力の強い自動車などに熱中して、世間で知られていた。たしか彼は、ステイム・ボートも持つていたころ。それはとにかく、妻は持つていた——ボインは、すべてのことを思い出した。あの男は、十六、七年前に、ニューヨークのマーヴィンという美娘と結婚したはずである——ジョイス・マーヴィン——この娘とは、ボインもハーヴァード卒業後、間もない一冬を、隔つたり、冗談をいつたりしたことがあつた。彼の女は婚約ができた時、ボインにも通知をよこして、同封の写真には「マーティンさん、さようなら」と、走り書きがしてあつた。彼の女は、ことによつたら自分のことを……とボインは思つていた。だが当時の彼は、そのようなことを確めるのには、あまりにも貧しかった。

「あの人は、少しも變つてはいない。美人というものは、驚くほど變らないものだ。それにしても、おれのことなど覚えてはいない。」こう思うとさびしくもあつたが、また心安くもあつた。どつちにしても、今度は十分に観察することはできよう。そして結果がいけなければ、自分の椅子を、ほかへ移すまでだと思つた。

定期船は、虫のようにたかつていたひき舟や、はしけの群をふるい落して動いた。東へ向つて進んだ。そこには、真青な大きな水平線がひろがつていた。ボインは、一冊の本をとり上げると、帽子を鼻の上まで下げて、ゆつたりとデッキ・チェアの中に身体をのぼして、ホキータ夫人の出でくるのを待つていた。

「これでよくつてよ——ええ、これでいいと思うわ。」ボインの近くで、笛のように子供っぽい、少女の声がした。彼が振りかえると、二、三步はなれたところに、ほつそりとしたあの少女が、幼児を重そうに抱いてくるのであった。

少女はちよつと立ちどまつた、ならべてある椅子を見て、ストウワードに会釈をすると、そのまま上等客室のドアの中に消えた。少女が立ちどまつた瞬間に、ボインは・小さな青い顔と、不安そうにしかめた眉と、細い褐色の眼と、ちよつと刺戟を与えてもすればすぐに笑い出しそうなるまで赤い唇を見た。顔が美しいとか、美しくないとかいう考えはおこらなかつた。顔の中には、いろいろな意味があらわれていたのである。

少女が船室にはいると、しつかりした早口で、こういうのが聞えた。

「ナニーさん、チップはベンガーを連れてきたの。だれがテリーといつしよに、ここへはいつたの。」

その時、ストウワードが見事なスーツケースを二つと、いく枚かの毛布を持つて、

「失礼いたします。あなたさまのケビンに、新しいお客さまがお見えになります。」といつて、ボインの前を通つた。

ケビンのドアのところに、ひとりの少年が立つていて、落ちついた眼で、ボインを見ていた。

「オーライ。これでいいよ。」と、少年は静かにいつた。十一歳ぐらいにはならうか。年の割には背が高く、ませていた。身体が丈夫そでないことは、その声でもわかつた。きちんとしたイギリス風の小学生の服装をしていたが、コスモポリタンらしくつた。あまりにもちがつたたくさんの文化、もしくはあまりも多くちがつたホテルになじんだばかりに、それでみがかれて、しかもすれているかのようにあつた。少年はボインを批判でもするように、それでも親しげに見つめて、「ぼく、ここにいるんです。」と言つた。

「君が。ぼくは、君のおとうさんがいるのかと思ひましたよ。」

「ぼくのおとうさんを知つてますか。」

「知つていますよ。でも会つたのは、よほど昔だから、ぼくのは、恐らくお話ししたことはないでしょう。」

ホーナーの息子は、しばらく考えていた。

「でも、ぼくたち、おとうさんといつしよになんか、いたことないんですもの。」間ちがつたことは言いたくないとでもいうように、少年はいった。

少年と同じ年、同じ背だけではあるが、青白い美しい顔に、もつと赤味をおびたひとりの少女が、そこへはいつてきて、少年と片腕を組み合せた。

「わたし、方々探してよ。ジュデイスさんが探しといでつて言つたわ。」

「ううん、ぼく、ここにいたんだよ。このおじさんと。」

その少女は、二重まぶたを上げて、二つの大きな上品な灰色の眼で、ポインにあいさつをした。それから、けしのように赤い唇をつぼめて、少年に言つた。

「まだ二週間もよ、テリー。我まんできて。」

少年は顔を赤くして、腕をひきはなした。

「黙つといでよ、ばか。このおじさんは、おとうさんの先だちなんだよ。」

「まあ、そうかしら。」少女はつぶやいた。

「ブランカ、あつちへ行つといで。」

少年にこう言われると、少女は赤い唇をふるわせて、デッキをかけて行つた。

「あいつは、わからずやで。ぼくと双子なのです。」と、少年テリー・ホキータは言いわけをするように言つてから、少女の後を追つて行つた。

ポインは、夫人に会いたいという好奇心が増してきた。ジョイス・マーヴィン——そうだ、あの人は青いすきとおるような顔に、あの少女と同じ赤いけしの花のような唇を持つていた。それにまた、大きな眼をたくみに動かす様子も、よく似ていた。

「多分あの子は、一人前の半分なんだからであろう。そういう時は、いつでも母親によく似るものだ。」と、ポインは思つた。だが、なんと訳のわからないことだろう。双子の片割れの女の子は、母親に似ているというのに、テリーは、クリフ・ホキ-

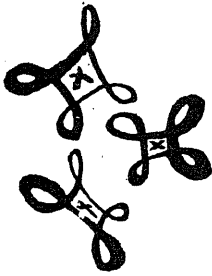
夕には似ていなかつた。それは——殊に、この少年の場合では、質が量におきかわつてゐるよう思へた。何に故であるかはわからなかつたが、ブランカの氣むづかしさは、世間にあるがちのものではあるが、兄の方は、たしかにそれとちがつたところがあるのだと思つた。でもかわいそうに、こうした勝れた子供は、どうして病弱に見えるのであらう。

突然に、前の方の特別室から、さつきの若い婦人が、幼児を連れて出てきた。眠むそうな幼児の手をひいて、母親らしくいたわりながら、デッキを歩いてきた。ポインの隣りの椅子に腰をおろして、子供を膝にのせると、

「いいわね、チップ。」と、嗜れやかな声で言つた。チップはあどけない元氣な笑みを浮べて、婦人の帽子をいじつた。二人とも満足げな様子で、ありありとしていた。

※

※



### 保育應答研究会

倉橋先生を中心に、毎回御熱心な多数の方々の御参加により、終始活潑な討論と、和やかな雰囲気、盛會を得て居ります。

一月と五月迄は、種々の都合上、勝手乍ら、休会させていただきます。

フレイベル館内

保育應答研究会係

幼児の教育 第三卷 第五号

定価 金五十円

昭和二十八年五月二十日発行

東京都中野区千光前町一〇

編集兼 倉橋 惣三  
発行者

東京都文京区大塚町三十五

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町二ノ五

発売所 株式会社 フレイベル館

振替口座東京一九六四〇番

○大誌御購読について注文申込その他はすべて發賣所フレイベル館宛願います